「自主自律の学び」を研究・支援する

TOKYO KASEI UNIVERSITY

東京家政大学 学修・教育開発センター

クレッド通信
2015.10

CRED通信 03

Center for Research and Educational Development

学生と教職員の交流会
学生主体のFD活動に向けて P.2～3

児童学科・保育科のFD
児童・保育カフェ報告 P.7

教職員研究会
「個の充実、そして組織の成長へ」を終えて P.4～5

お知らせ
コミュニケーション・ウォーキング実施 P.8

私のFD
食によるFD P.6

板橋アートキャンプ2015での手づくりカフェ（手嶋撮影）

第２回

学生と教職員の交流会

17:30～19:30 / Cafe Luce（カフェ ルーチェ）（16号館食堂）
参加者　学生31名（1年生：3名、2～4年生：28名）、教員22名、職員5名

前期最終日の7月31日（金）夕方から、昨年に続き第２回の「学生と教職員の交流会」が開催された。この交流会は、カフェ形式の気軽な雰囲気の中で、学生たちと教職員が意見交換する場として企画されたものである。ここでは、家政大について学生たちが日頃感じていることや考えていること、家政大で実現してみたいことを引き出すことが趣旨である。これに加え、今後の学生主体のFD（ファカルティ・デベロップメント）活動へ向けた可能性を探ることも目的とした。今年の交流会では、学生が主役となれる自由で活発な雰囲気を目指すために、新しい試みをいくつか取り入れてみた。ひとつは、参加学生を５～６名ずつ１つのグループに振り分ける際、グループごとの進行役（ファシリテーター）をHulip所属の参加学生に依頼した。幸いHulip所属の学生が６名もおり、さらに４年生の学生が自ら進行役を買ってでてくれたおかげで、各グループ（計６グループ）に進行役を配置することができた。交流会前半はグループごとに軽食を食べながら学生だけで懇談を行った。ここで進行役の学生を中心に自由な雰囲気がつくられ、参加学生の緊張もほぐれた。そうした自由な雰囲気のなか、各グループに教職員を交えた後半においても円滑に会話が展開し大変有意義なものとなった。もうひとつの新しい試みとして、交流会の最後に各グループから出された様々な意見をパネル上で紹介し、今回の交流会での意見を参加者全員で共有した。以下に、交流会の内容について紹介し、最後に行ったアンケートの回答をいくつか挙げる。

進行：前半と後半の２部形式

前半（17:30～18:05）学生のみでのCafé

参加学生は6グループに分かれ、各グループには進行（ファシリテーター）役の学生が1名配置された。始めに司会からFDについての簡単な説明と、他大学で展開されている「学生主体の」FD活動例の紹介があった。次に進行役の代表学生より、Hulip活動とLibrary matesについての紹介をしてもらった。続いてグループごとに軽食を食べながら、家政大を良くするために何をするべきか、何ができるか、何をしてみたいか、そうした希望はどのくらい実現できそうか、などを中心に自由に討議した。

後半（18:05～19:30）教職員の参加・交流

ここから各グループに数名ずつの教職員が加わって、前半に学生から提案された討議内容とあらかじめ設定されたテーマについて学生と一緒に会話を深めた。事前に用意したテーマは下記の通りである。

- 授業アンケートについての意見
- 家政大をよりよくするために、学生ができること
- 家政大でこんなことがしたい！こんなことができればいいのに！
- 教職員との関わりについて、教職員に望むこと
- 家政大のイメージ：入学前とどう違う？
- 自主的な活動や他大学との交流などについて

その後、各自の意見はポストイットに書きだし、グループごとに貼り出した。各グループの進行役は出された意見や要望を集約して口頭発表し、それらの意見に対してグループ内の教職員の代表に回答や感想を述べてもらった。このとき教職員には、学生からの要望の実現可能性や対策について努めて触れるようにしてもらった。

グループごとの意見として共通してい

たものとして、「学科内での先輩・後輩との交流の場や機会がない」、「他の学科との交流がない」、「教員と交流する機会が少ない」が挙げられる。こうした意見は交流会終了時にとったアンケート内でも多く書かれていた。学年や学科を越えた交流を可能にする機会を増やすことに対する要望が多いことから、今回のようなカフェ形式の交流会の開催をもっと増やし、学生の自由な参加を展開する必要がある。とにかく学生は先生と話したい！！ということは間違いない。授業アンケートに関しては、「15回ある授業の７回目と15回目の両方でアンケートを実施してほしい」、「アンケート内容のフィードバック」、「アンケートの設問が理解しにくい」という意見が出された。そのほかには、「学内Wi-Fi設備の充実」や「履修申請を前期と後期で分けて欲しい」、「3号館のロッカーの整備」という要望も出された。こうした学生からの意見や要望のいくつかに対して、教職員が１～２年以内に対応・実現化することができれば学生はより積極的に大学生活を充実したものに変えていけると期待される。

教職員からのアンケートのなかで注目すべきものは、このような交流会の機会をもっと増やしてほしいという意見と、学生や教職員から出される意見・要望をこの交流会のなかで総務部長、経理課長、学長、学園理事と共有したいという意見、そして狭山キャンパス内でも「学生と教職員の交流会」を実施したい、という意見が挙げられる。

以上より第２回目の「学生と教職員の交流会」の報告を終えるが、このような形式の交流会に寄せる期待は確実にあり、ここを起点に学生主体のFD活動の展開も可能と感じられた。またこの交流会が、学生、教職員との間で意見を酌み交わし吸い上げるひとつの自由な場になりえるものとして今後も工夫しながら継続する必要性を実感した。

【実施記録】意見発表

グループ１
- 他学科の活動を知る機会があったらよい（造形アートキャンプ→児童）。
- 授業アンケートの結果をフィードバックしてほしい。
- 授業アンケートの実施を最終回に近い時期ではなく、各期の中間の時期にアンケートを実施し、その結果を残りの授業の改善に活用するのが良いと思う。

グループ２
- 学生から積極的に教員へ声をかけたり、働きかけがあっていい。
- 先輩と後輩の繋がり、他学年との交流の機会を多くもちたい。
- ロッカーの中があふれやすい学科がある一方で、もて余してる人が多い学科もある。学科によりロッカーの大きさを変えられるといい。

グループ３
- 台風の警報を早めに出してほしい（通学に２時間以上かかる）。
- 別の学科や他学年との交流をもっと持ちたい。

グループ４
- 授業アンケートは、スマホからの回答では、皆がきちんと回答しているのか実感がわかなかった。今までのようにマークシートに回答すると実感がわく。
- 全般的に、共同で利用する施設が不便。たとえば、パソコン室は９時からしか使用できない。／食堂の座席数が学生数にくらべ少ない。／センターは17時で終了するので、授業後、来課しても利用できない。／自動販売機がかたまって設置されている。共同利用室（ソフトよりハード部分の改善を要求）
- 入学時にもらった便覧にオフィスアワーが書いてあるが、年度が替わるとオフィスアワーも変わってしまい、わからなくなる。

グループ５
- 服飾美術学科のファッションショーのような取組みはいい。（児童教育学科）
- ランチミーティングを開催する。
- 学内で学生や教員がリラックスできる場所が少ない。（教員から）

グループ６
- 授業アンケートは全部の科目でアンケートを実施してほしい。
- 学内交流の機会を増やしてほしい
- 食堂を増やしてほしい。図書館等で夜遅くまで勉強したい。
- 16号館のパソコン室にしか印刷用紙が用意されていない
- ネット回線（無線LAN）があまりよくつながらない
- １年生の時から先輩の話を聞く機会がほしい。また談話室のような場所があるといい。
- この交流会には、事務方の課長以上（総務、管財、教学、図書館他）にも参加してほしい。（教員から）

大西 淳之
（おおにし じゅんじ）

本学栄養学科准教授（生化学研究室）、学修・教育開発センター参事。
東京医科歯科大学難治疾患研究所、財団法人国際科学振興財団バイオ研究所を経て、平成22年本学着任 / 研究分野：精神栄養学、健康生成論 / 著書：『レーヴン・ジョンソン生物学上・下』（培風館）

佐藤 隆弘
（さとう たかひろ）

本学児童学科講師（心理学研究室）、学修・教育開発センター専門委員。
平成23年本学着任 / 研究分野：学習心理学、行動分析学

教職員研究会
「個の充実、そして組織の成長へ」を終えて

平成27年9月1日（火）9：50～17：30

教職員研究会の企画

例年より約10日早い9月1日に、平成27年度教職員研究会が行われました。1年に1度、原則としてすべての教職員が集合する教職員研究会は、大学が取り組むべき課題を全学で共有するための非常に貴重な1日です。この1日をどう使うか、教育・学生支援センターを中心に、5月から準備を始めました。

大学の教育改革を巡る近年の動向および本学の現状分析をふまえて設定した、本学FDの平成27年度の目標は、①学科・科のカリキュラム・チェックリスト（マップ）の作成、これと関連づけて②シラバスの到達目標の見直し、です。これらの目標遂行の助けとなる講演および研修を外部講師にお願いしたい、というのが教職員研究会企画の出発点でした。そして、名古屋大学高等教育研究センターの夏目達也先生にご快諾をいただき、第1部の基調講演および第2部の教員向け研修の講師が決まりました。

つぎに考えたことは、第2部で、職員向けの研修を教員向けとは別に行おうということです。教育を直接に担うのは教員ですが、大学が教育改革を推進するには、チームとして機能する職員力が絶対に必要です。教員と職員が同じ研修に参加することにも意義はあるが、今回は職員力に焦点を当てた研修を行おうと考えました。そして、職員チームが何度も企画会議を重ねて実現したのが、筑波大学大学研究センターの吉武博通先生をお招きしての職員研修です。

教員と職員が別々の研修を受けたまま終わりにしたくないということで、最後に第3部の教職員カフェ兼懇親会を設定しました。

教職員研究会・当日

第1部　基調講演
名古屋大学高等教育研究センター
夏目達也先生

教育改善を楽しく進めるためのヒント

「教師が何を教えるか」から「学生が何をできるようになるか」への転換が求められていること、学生参加の双方向授業が重要であることなどのお話が印象に残りました。人の一生は、ある意味「主体的な学び」の連続です。学生たち自身が学修に主体的に関与する姿勢を身に着けて卒業していくことこそが、大学教育の最重要の目標なのかもしれません。

夏目先生は語りかけるように、ときに聴衆に問いかけながらお話しになりましたが、講演そのものが双方向授業の見本になっているように思えました。

講演の最後に、名古屋大学高等教育研究センター「ティップス先生からの7つの提案」へのリンクが紹介されました。提案（教育改善を楽しく進めるためのヒント）を生かすかどうかは、私たち聴衆（＝学生）に委ねられました。

第2部　教員向け
名古屋大学高等教育研究センター
夏目達也先生

シラバスの書き方ワークショップ
（到達目標を中心に）

教員は毎年シラバスを書いていますが、自己流という方が大半ではないでしょうか。この研修では、シラバスの構成要素、たとえ

ば到達目標や予習時間などについて、その意味や考え方のお話があり、視野が広がる思いでした。到達目標を実際に書くことで得られた気付きもありました。

夏目先生はグループワークのお題を提示した後、教室内を移動しながら参加者にマイクを向け、当意即妙のコメントを返していきました。ここでも、参加型授業の進め方のヒントが得られたように思います。

なお、学修・教育開発センターでは、本研修および基調講演と関連する以下の図書を貸し出していますので、ぜひご利用ください。

- 池田輝政ほか「成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集」玉川大学出版会
- 夏目達也ほか「大学教員準備講座」玉川大学出版会

第２部　職員向け

筑波大学大学研究センター
吉武博通先生

職員が拓く大学の未来
ーマネジメントとリーダーシップの確立に向けてー

※この項は、教育・学生支援センターの鹿沼行央課長にご執筆いただきました。

職員は日々、責任をもってそれぞれの担当業務を正確に遂行しています。しかし、大学職員に求められる能力を高める意識をもって業務に取り組んでいる人はごく少数ではないでしょうか。吉武先生のお話しは多岐に亘りましたが、この研修の副題にある「リーダーシップ」とは、目指す方向に向けてメンバーの能動的な行動を引き出す能力であり、組織の管理者だけでなく組織のあらゆるメンバーがもつことのできる能力であると説明されました。職員ひとり一人は、高める能力のアドバイスを得られたことでしょう。

グループディスカッションで吉武先生は、グループごとに話し合われたことを発表させて、コメントを返しました。このコメントにも職員がこれからやるべきことのヒントがあったように思えました。

第３部　教職員カフェ兼懇親会

平成24年度の教職員研究会ではじめてワールドカフェ方式でオープンして以来、教職員カフェは教職員研究会の定番企画になりました。ふだん話す機会のない他部署の教員・職員あるいは教員と職員の間で話が弾むと今年も好評でした。カフェの最後に、「5年後の東京家政大学の教育はどうあるべきか（どうあってほしいか）」「そこに近づくために、教員にできること、職員にできること・個人としてできること、組織としてしなければならないこと」をまとめてもらいましたが、各テーブルから建設的な意見が発表されました。

今後に向けて

職員研修を独立させる試みは、事後のアンケートから見ても好評だったようです。一方、多様な学科をまとめて研修することへの疑問、第2部が助教・助手に少し難しかった、部屋が狭かったなどの声もアンケートから聞こえてきました。

教職員研究会は、「必修授業」のようなものかもしれません。大学として取り組むべき、共有すべき課題と向き合うために、全教職員の参加を求める。しかし一方で、一人一人の予備知識、意見、所属部署などの違いから、すべての参加者に100%満足・納得してもらうことが難しい。困難はありますが、今年度の知見を生かして、教職員研究会の意義を高めていきたいと考えています。

講師の先生方、教育・学生支援センターの方々、熱心に参加してくださった教職員の皆さん、どうもありがとうございました。

Report

井上 俊哉
（いのうえ しゅんや）

本学心理カウンセリング学科教授（心理統計研究室）、人文学部長、学修・教育開発センター所長。
平成3年本学着任 / 研究分野：教育心理学、心理統計学 / 著書：『メタ分析入門』（東京大学出版会）、『心理検査法入門』（福村出版）、『心理統計の技法』（福村出版）

食によるFD

造形表現学科　手嶋 尚人

はじめに

造形表現学科における教育上の特徴ですが、学生への個別対応というのが必要となります。実習においては30、40人いても作品へのアドバイスの際には一人一人の学生に対峙する必要があり、授業中に作品を通して学生を知るということはもちろんですが、日頃から距離を縮め学生との信頼関係を築くことが、課題に対し厳しいことを言うためには欠かせません。

学生との距離を縮める一つの方法として、食を共にするということが大きいと思います。また、食には教育上他にも様々な効用があります。

食をつくる・共に食べる効用

食を楽しむ

インテリアの授業で以前、「食の絵日記」という課題を出したことがあります。学生の食生活がすごいことになっているのだと思いました。食の内容も悲しいものが有りましたが、それ以上に一人で食べる多さに驚きました。食が単に空腹を満たし栄養を補給するだけのものとなっている感じです。食を共にする豊かさや楽しさが少なくなっている気がします。大学において積極的に食の楽しさを伝えることも重要だと思います。

食をつくる

共に食べるだけでなく共につくることもやっています。食事をつくることは、デザインすることと似ています。食事の場の設定をどうするか、どういう食事が良いか、何人なのか等考え、積算、買い出し等を事前に行い、調理、食卓のセッティングまで様々な段取りがあります。それらをクリアして行くことはなかなか大変な能力です。食べる人数が多いほどまた困難になります。他の人との協力も必要となってきます。そして、何より食べる人が安心して美味しく食べられ、幸せな気持ちになってもらうことを考える優しさが大切です。これらを学ぶことはデザインにも通じ、人として大切なことを教えてくれます。今盛んに求められている社会人基礎力を身につけるための有効な体験でもあります。

教員（大人）が関わること

この食の場に教員が関わることも重要だと思っています。それは、最近同年代である学生同士とのコミュニケーションをとることが苦手な学生が増えているので、食の場を通して、大人が学生同士の場ととりついでやる必要も感じています。

憩いの広場の活用　火の力

憩いの広場ができました。ピザ窯も有ります。BBQもできます。屋外での食の場はまた格別です。人の心をオープンにします。また、直火の魅力も大きいです。今の多くの学生にとって火をおこし管理することは初めての経験となります。酸素が無いと火が起きないことも頭でわかっていても実行できない。火という原初的なもので物の理を学べます。火を起こすところから始めるのは大変です。でも大変なことの楽しさを知ってもらいたい。これも大きな学びだと思っています。そして、ピザ窯の火は何より美しい。

おわりに

年に何回か講評会の後、イベントの打上げ等で、食の場をつくっています。関われる人数は全体からすれば多く有りませんが、その子たちがキーとなり、与えられることではなく自分たちでつくっていく文化を発信していってくれたら良いと思っています。

食によるFDがムーブメントになると楽しいですね。

ピザ窯の美しい火ーやっと着火できた
ヒューリップの学生企画（坂本理恵撮影）

手嶋 尚人（てじま なおと）
本学造形表現学科教授（インテリアデザイン研究室）。学修・教育開発センター参事、ヒューマンライフ支援センター参事。
建築家。建築設計事務所を経て、平成14年本学着任 / 研究分野：建築設計、住民主体のまちづくり、こどもと環境 / 著書等：「イタリア・ボローニャにおけるアートプロジェクトの取り組み」（日本都市計画学会）、「地域再生―人口減少時代の地域まちづくり」共著（日本評論社）。

児童・保育カフェ報告

保育科　細田淳子

児童・保育カフェのアイディア

学内のさまざまな業務の中でも、入試などの全員参加の仕事は思いがけない副産物を生むことがある。実は、今回の児童保育カフェのアイディアも入試の待機時間における教員同士の雑談の中から生まれたのだった。

「オープンキャンパスで児童学専攻と育児支援専攻の違いを説明するのって、なかなか難しいよね。」

「まあ児童学科と保育科は、年数や取得できる資格免許の違いがあるけれど、狭山の子ども支援学科との違いは、基本的な資格免許が同じなだけに、説明は苦しいね。」

「だからこそ、もっと学科の特徴を明確にしていかないといけないんじゃないかな。」

「毎月の科内会議ではそこまで話し合う時間的な余裕がないからね。」

「昨年末には学長から、“学科・科の将来構想に関する意見の提出依頼”が全学科長・科長あてに来たので、個人としての意見を提出したという報告を聞いたけど、みんなで話し合いたいね。」・・・という具合に、あっという間に意見はカフェ方式で行う方向でまとまっていった。

児童・保育カフェの方法

方法は、次のように決めていった。科内会議メンバーの自由参加とする。日程は時間に余裕のある３月４日（水）の科内会議終了後の２時間とする。予算はないので飲み物は各自持参し、菓子類は、研究室にあるものを持ち寄ることとした。

内容については、事前に話し合いの根幹や、手順、方向性について科内教授会で話し合っておいた。さらに会場レイアウトは、可動式の机を４人ずつ座れるようにして島のように配置、それぞれの島に、科内教授会メンバーが島の主として座わる。これによって、どこの島も話の方向がずれないことを目指した。学修・教育開発委員の趣旨説明のあと、第１回セッションを30分間行い、合図で島の主以外は自由に席替えをする。最後に各自が机の上のポストイット（10×10cm）に重要だと感じたことを１枚１項目書き、記名し、教室前面の大きな模造紙に貼ってまとめとした。

児童・保育カフェの効果

集合時間になると飲み物を手に集まってきた人たちが、みな笑顔で、「何が始まるんだろう？おもしろそう…」という柔らかな雰囲気が漂っていた。これは事前に集められたお菓子の効果が大きいと思う。（私だけではないと思うが…。）実際、高級チョコから名店煎餅まで、たくさんの美味しそうなものがそれぞれの“島”にセットされた。

カフェが始まると役職者も、年齢も、家政大に長く務める人も、新任者も関係なく、みんな実によくしゃべった。これは１グループ４人であったことが、よかったようである。聴き役ばかりではいられないことや、話せばしっかりよく聞いてもらえるという安心感が生まれやすい人数だったと思われる。

児童学科保育科は大きな組織であり、研究室も全員が近くに配置されているわけではない。そのような中、今まで学科・科の将来を語り合う、という大事な時間を持つことがなかなかできなかった。今回、具体的な結論が出たわけではないが、問題意識を共有することができた。このようなテーマでお互いに前向きに意見を出し合える土壌、つまり学科・科によい人間関係があることを改めて認識できた。さらに、将来への危機感をみんなが共通して持っていたことなどが、第１回カフェの収穫といえるだろう。学生にとって有益な学びの場が作れるように、教員にとっても働きやすい場にするために、話し合いの場を設定することが大切だろう。そのためには、今回のように気楽で楽しい語らいの場を作り、本音で語り合う必要があると感じた。

以上が３月に行った児童・保育カフェ報告である。

細田 淳子（ほそだ じゅんこ）
本学保育科教授（音楽表現研究室）。日本オルフ音楽教育研究会代表、幼児音楽教育研究会常任理事、日本保育学会会員。平成３年本学着任 / 研究分野：幼児音楽表現 / 著書：『わくわく音遊びでかんたん発表会』『自然をうたおう』『わらべうた・手合わせ遊び・子守うた』（共にすずき出版社）、『あそびうた大全集』（永岡書店）　など。

コミュニケーション・ウォーキング実施

去る5月10日（日）、天候にも恵まれ、学生93名（板橋校舎90名、狭山校舎2名、運営補助1名）、教職員30名の参加のもと、第2回目となるコミュニケーション・ウォーキング（以下、ウォーキング）を実施しました。

ウォーキングは、昨年度、前進路支援センター所長の中村精二先生（造形表現学科教授）の発案・企画により試行的にスタートし、その成功を受けて、今年度よりキャリア形成支援講座「自己発見セミナー」として位置付けられました。

お墓は卒業生が建てたことも学びました

ウォーキングの目的は、「本学の校祖渡邉辰五郎先生縁の地を訪ね、本学の建学の精神、沿革・歴史を理解する。」、「他者との協働体験をとおして、学生間のコミュニケーションを促進する。」の二つです。

本学の建学の精神、沿革・歴史の理解を深めるため、参加者全員に『スタートアップ　エクササイズ』の建学の精神に関するページを読む事前学修を課しました。また、一つ目のチェックポイント谷中霊園の渡邉先生の墓前で、岩井絹江常務理事より先生の功績、本学の歴史や卒業生によるお墓建立の経緯についてお話しいただきました。更に、二つ目のチェックポイント樹木谷坂の和洋裁縫伝習所跡（現東京ガーデンパレス）で、本学の歴史が今自分たちの立っているこの地から始まったのだと実感してもらう機会を設けました。

コミュニケーションを促進するために、オリエンテーションでは、①1グループの編成は6人程度で、極力知らない学生とグループになること、②スタートからゴールまでの行程管理はグループ内の話し合いによること、だけを指示しグループ編成は学生の意思に委ねました。終了後は「振り返りシート」を使いグループごとに感想などを共有しました。

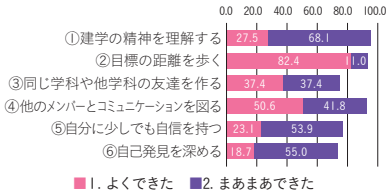
ウォーキングのコースは、A：大学～谷中霊園～湯島（10km、復路は原則電車）、B：谷中霊園～湯島～大学（約13km、往路は電車）、C：大学～谷中霊園～湯島～大学（約20km）の3コースを設けました。学生が自身の体力とその日の体調に合わせ、それぞれ51人、15人、26人が選択しました。当日配布された中村先生作成のガイドブックには、コース内の歴史的建造物についての説明や地域概要が記されており、「プチ東京下町観光が出来て楽しかった」とのコメントもありました。

樹木谷坂の和洋裁縫伝習所跡の碑

他学科の人と話すことによって世界が広がりました

参加した学生の満足度は100％（大変満足57.1％、まあまあ満足42.9％の合計）でした。

図1　参加者の自己評価（N=91）



その他のアンケート結果は、図1の通りです。「建学の精神を理解する」、「他のメンバーとコミュニケーションを図る」については、「よくできた」「まあまあできた」の合計はいずれも90％を超え、概ね目的を達成したと思われます。

「振り返りシート」を見ると、約75％の学生にとっては体力的に厳かったようです。しかし、そのような中で、①他のメンバーに対して自分の意見はハッキリ言うことができた（72.5％）、②他のメンバーの意見をしっかり聞くことができた（82.4％）、③他のメンバーの言動・態度・表情に注意を払うことができた（84.6％）、と互いに慮りながらウォーキングができた様子が分かります。

その結果は「他学科の人とコミュニケーションを取ることができて、楽しかった」という感想にも表れています。一方、極力知らない学生とグループになるよう指示したものの同じ学科で固まってしまうグループもあったことから、始めにグループ分けをしておいて欲しいとの要望もあり、グループ編成のあり方を検討する必要もありそうです。

自分の可能性は無限なんだなと思いました

様々な気づきを得た学生達ですが、「私には、最後までがんばりつづける力があることを知った。20km歩いて本当によかった。」などのように、達成感や自信を持てるようになったことも、このウォーキングの大きな効果ではないでしょうか。

また、今回の実施で企画・運営の道筋がしっかりとできたことから、今後、キャンパス・インターンシップとして、学生が企画・運営側に加わり能動的に関わっていくという可能性も見出せたように思います。

最後に、岩井常務理事、中村先生、任意参加の先生方をはじめ、安全管理等の運営面でご協力くださいました教育・学生支援センター、狭山学務部、保健センターの職員の方々、そして終了後「憩いの広場」でのピザパーティーの準備を進めてくださいました手嶋尚人先生（造形表現学科教授）・大学院生高井恵里花さん等多くの方々にご協力いただきました。ありがとうございました。

永岡 弘美（ながおか ひろみ）
進路支援センター

2015年10月発行　編集＆発行：東京家政大学 東京家政大学短期大学部　学修・教育開発センター
構成＆DTP：東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター　坂本理恵
〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1　TEL：03-3961-0284　E-mail：cred@tokyo-kasei.ac.jp